

軽度麻痺患者用短下肢装具の使用状況調査 ～Usability 主軸の装具開発を目指して～

新潟医療福祉大学大学院 義肢装具自立支援学分野・
大井和子, 阿部薫

【背景】

脳血管障害や脳挫傷などの脳損傷によって惹起される片麻痺症状において、下肢の典型的障害としての内反尖足は立位や歩行に支障を来すため、ADL の向上を目的として下肢装具が処方される。しかし軽度の麻痺に対する下肢装具の処方は統一されていないのが現状である。軽度の麻痺であっても長期的な予後を勘案すれば、足関節の変形予防や日常生活上の安全性の観点から下肢装具の使用が推奨される。しかし片麻痺者本人も本来的には下肢装具の使用は回避したいところであるため、従来型のプラスチック製や金属製の下肢装具などの「かさばる」タイプを使用しない傾向にある。

これらの対象者に処方される代表的な短下肢装具3種、すなわちシューホーンブレース(以下、シューホーン)、オルトトップブレース(以下、オルトトップ)、サポーター型(以下、サポーター)の使用者に対し、装具の使用状況や使用感、要望事項等についてアンケートを行い、現状を把握することによってUsability 主軸の装具開発を目指す研究の第一段階とした。

【方法】

1. 対象者: 大井製作所で短下肢装具(シューホーン, オルトトップ, サポーター)を作製した患者50名。
2. アンケート方法: 研究目的や内容等を説明した研究協力依頼書とアンケート用紙を郵便で送付した。原則的に装具使用者本人に記入してもらすが、記入が困難な場合は家族に記入してもらうこととした。
3. アンケート内容: 現在使用している装具のタイプ、装具の使用場所、屋内外兼用の装具を希望するか、装具を自分で装着できるか、装具の外観は気になるか、装具のデザインの満足度、装具使用に関する要望等について質問した。

【結果】

アンケートを50通発送し、有効回収数は25であった。アンケート集計は、単一回答項目を表1にパーセンテージを、複数回答項目は表2に実数を示して集計した。

表1では、使用している装具のタイプによってアンケートの回答結果が異なるため、シューホーン16名、オルトトップ6名、サポーター3名の3群に分類して集計した。使用場所は3タイプとも屋内外兼用が多かった。屋内外兼用の装具を希望が多く、特にサポーター使用者は100%であった。使用時間については外出時のみに使用している場合が多かった。装具を自分で装着できる使用者が多かった。装具の外観に関しては気にならない人が多く、装具デザインについては気にしてい

ない人が最も多かった。

表1. 短下肢装具の使用状況や使用感等(単一回答)

		シューホーン	オルトトップ	サポーター
		16名	6名	3名
使用場所	屋外	31.3	16.7	33.3
	屋内	6.3	0.0	0.0
	屋内外 (未回答)	62.5	66.7	66.7
		—	16.7	—
屋内外兼用	希望する	56.3	50.0	100.0
	希望しない (未回答)	18.8	33.3	0.0
		25.0	16.7	—
使用時間	ほとんど使用せず	0.0	16.7	0.0
	一日中使用	43.8	33.3	33.3
	外出時のみ	50.0	33.3	66.7
	リハビリのみ (未回答)	6.3	0.0	0.0
		—	16.7	—
自己装着	可能	68.8	66.7	66.7
	不能	12.5	16.7	33.3
	要介助 (未回答)	18.8	0.0	0.0
		—	16.7	—
外観	気になる	25.0	50.0	33.3
	気にならない (未回答)	62.5	33.3	66.7
		12.5	16.7	—
デザイン	満足	12.5	16.7	0.0
	不満	0.0	16.7	0.0
	気にしない	87.5	66.7	100.0
				(%)

短下肢装具使用に関する要望等(表2)については、装具使用時に靴が履きづらい、気に入った靴が履けない、大きいサイズの靴が必要など、靴使用の不便さに関するものが上位を占めた。その次は足が蒸れる、足が窮屈など足部と装具の適合性に関する事項が占めていた。

表2. 短下肢装具使用に関する要望等(複数回答)

	シューホーン	オルトトップ	サポーター	計
	16名	6名	3名	
1 靴が履きづらい	11	4	1	16
2 気に入った靴が履けない	7	4	3	14
3 大きいサイズの靴が必要	8	2	2	12
4 足が蒸れる	3	3	2	8
5 足が窮屈	1	1	3	5
5 洗えない	5	0	0	5
7 価格が高い	3	0	0	3
8 ベルトが留めにくい	2	0	0	2
9 デザインに不満がある	0	0	1	1

【考察】

軽度の麻痺に対して処方される短下肢装具に共通する使用状況は、屋内外兼用であるが主に外出時に使用され、自己装着可能であることが判明した。また装具装着を気にせず、デザインよりも機能性を重視していることも浮き彫りとなった。さらに短下肢装具使用に関する要望等に関しては、装具を装着することにより、健足よりも「大きな足部」になったことで左右同寸法の既成靴の使用が困難であることに不便さを感じていることが明らかになった。

【結論】

要求される短下肢装具に求められる機能として、屋内外兼用可能で適合性が良く、自己装着可能な構造で、靴が履きやすいように「かさばらない」大きさと素材によって構成されるものと示唆された。